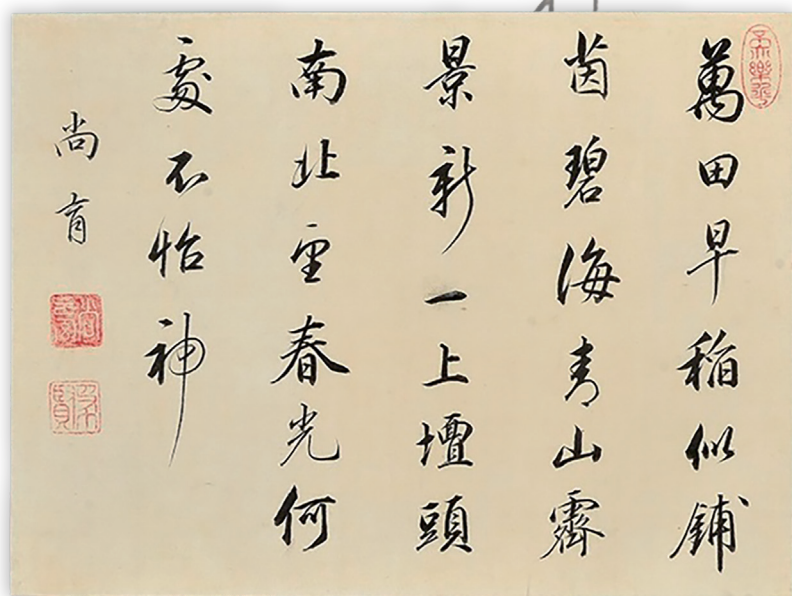


御城下子

Ugushikudayori

首里城基金復元事業

被災した美術工芸品の復元について



北里春光何

不怡神

萬田早稻

茵碧海秀山霽

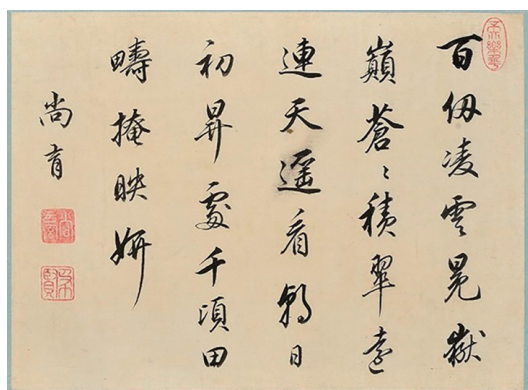
被災した美術工芸品の修理・管理体制等の検討を目的に、令和元年度に第三者委員会「首里城美術工芸品等管理委員会」を設置。

計4回の委員会、及び専門分野のワーキングの提言をもとに、修理・復元を行っています。

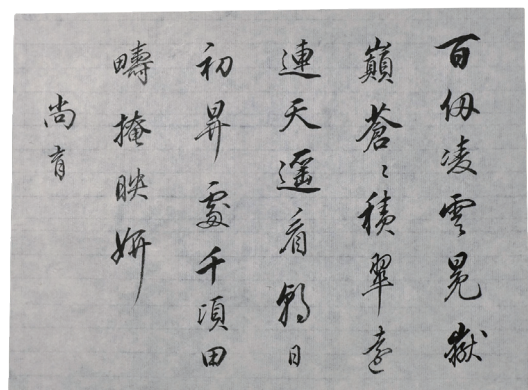
令和6年度に行われた書跡の復元製作の一部をご紹介します。

『尚育王筆「首里八景詩」書帖』の復元

一、冕嶽積翠



原本



復元

資料概要

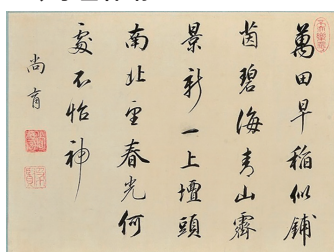
【名称】尚育王筆「首里八景詩」書帖
 【法量(cm)】(本紙)縦 23.0/横 31.0 全8枚共通
 【修理施工者】幸喜洋人

首里の風光明媚な場所といわれる通称「首里八景」(弁ヶ岳・雨乞御嶽・弁財天堂・龍潭・虎頭山・崎山馬場・西森・萬歳嶺)を詠んだ詩であり、尚育が見た風景と思いを垣間見ることができます。

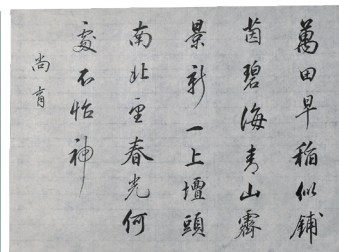
損傷状態

令和元年の首里城火災時に焼失してしまいました。

二、零壇春晴



原本

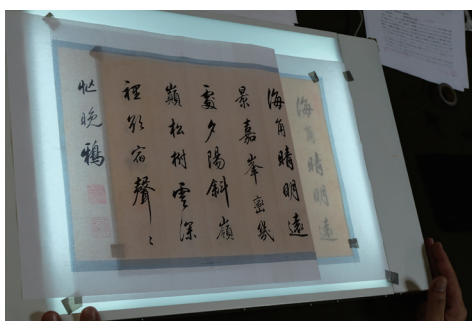


復元

復元工程

七言絶句、八首ということで文字数が236文字(署名を含む)に上り、各文字の造形・筆致を憶え込んでから本製作に挑む必要があるため、令和6年度は試作製作とし、次年度の本製作に備えることとなりました。

技法



臨書技法・敷き写し技法

復元模写の技法として、原本の原寸コピーを横に置いて行う伝統的な臨書技法で行いました。複写機による正確なコピーを活用して、用紙(料紙)の下に原寸コピーを置く敷き写し技法も併用し、より精巧な復元模写を目指します。

道具・材料

筆は、小筆の「玉章」を用いることにしました。原本が琉球王国国王の書跡であること、漢字を揮毫したものであることから中国の小筆が最も考えられる選択肢となります。しかし復元模写においては、非常に多くの文字を繰り返し練習し、本製作の揮毫につなげることが必要です。品質が整った小筆が数十本以上必要となるため、品質に定評のある「玉章」に決定しました。

墨は原資料に近い黒色・質感に近づけるため、仿古墨「珍寶墨 含経堂蔵墨」を用いることにしました。原本の墨についても、今回用いる仿古墨と同様に油煙墨であったとみられます。

用紙は中国の仿古紙を用いることにしました。原本が紙本か絹本かの情報が残されていなかったため、画像による判断に頼ることとなりました。墨が乗っている部分をつぶさみていくと、紙本特有の横向きの簀子目が確認できたため、原本は紙本であると判断しました。原本の料紙は紙繊維の生成りの色合いが残っており、かつ墨の滲みが見られなかったため、熟紙(加工紙)を用いることとしました。



墨

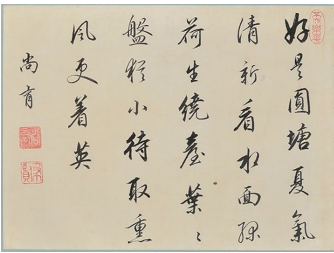


筆

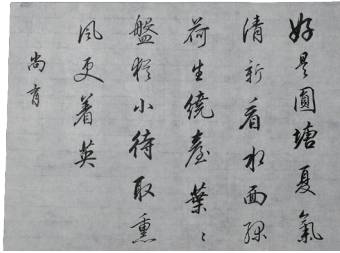


用紙

きょうだいしんか
三、経臺新荷

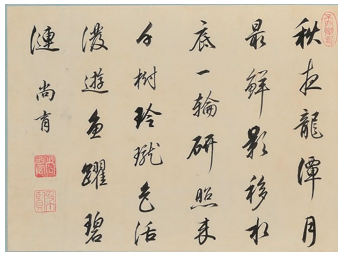


原本

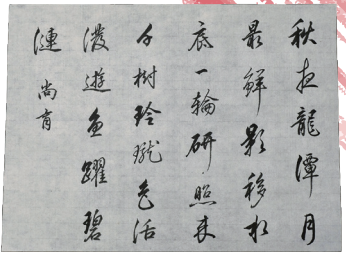


復元

りゅうたんやげつ
四、龍潭夜月

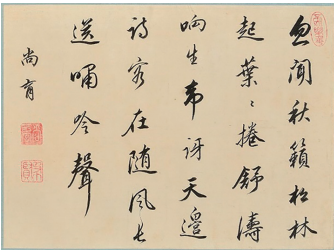


原本

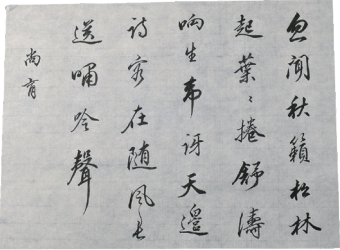


復元

ござんしょうとう
五、虎山松涛

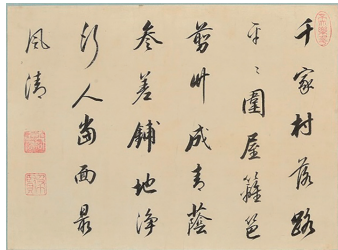


原本

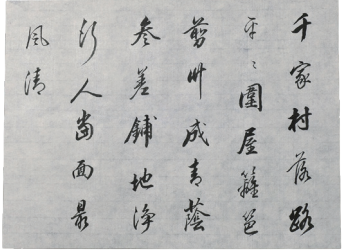


復元

さきやまくり
六、崎山竹籬

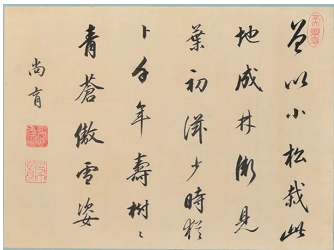


原本

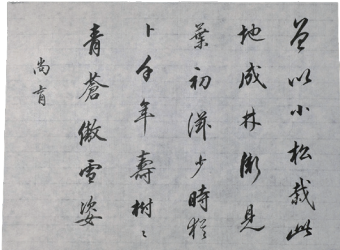


復元

にしむいこまつ
七、西森小松

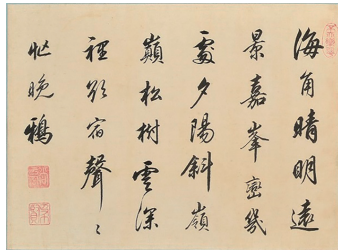


原本

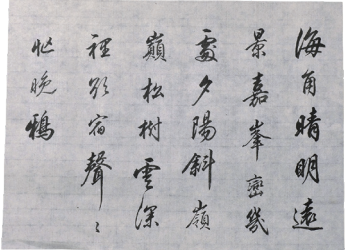


復元

ばんざいれせきしよう
八、万歳嶺夕照



原本



復元



試し書き

試し書き

墨を磨る、筆に墨をなじませる、文字を写す工程を墨色が安定するまで繰り返します。試し書きでは、^{ひつぼくけんし}筆墨硯紙の調子を安定的にコントロールできることを目指しますが、同時に原本の文字の造形性を憶える意味もあります。本文が八首八枚で都合236文字となり、これらの一文字一文字の造形を憶え、文字間試し書きのつながりを把握していることが試作・本製作の準備としては必須となります。



復元模写

試作

原本は同一の筆・墨・(硯・)紙を用いて、一続きの時間内に揮毫したものと判断できたため、試作においても同一の筆・墨・(硯・)紙を用いてひとつらなりの時間内に八首八枚すべての揮毫をおこなうこととしました。一枚を俯瞰でみたときにどこまで完成度の高い復元模写ができているか、復元模写八枚すべてを俯瞰でみたときにどこまで完成度の高い復元模写ができているかを目標に製作を行います。

本製作に向けて

印章

本作品(原本)の印章(三顆^か)は他に使用例の知られないものでした。このため印章については本作品の原寸画像から模刻(復元製作)を行うこととなります。尚育王の印章は現存しておらず、情報も史資料には記述が見当たりません。印材については、印影からみて最も蓋然性の高い石材を用いることとし、模刻の準備作業を進めています。

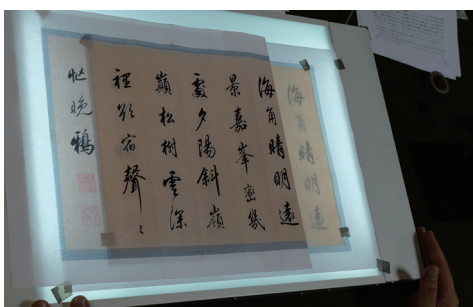
料紙

試作を通して、今回用意した料紙(仿古紙)の質感で概ね穏当と考えられます。料紙の検討は、首里王府に関わる琉球の書跡・絵画で広く用いられた宣紙^{せんし}・竹紙^{ちくし}を中心に、科学調査を含めて、今後も続けていきます。

首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の
収集・復元・保存・人材育成に向けて



首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産でしたが、沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

約450年にわたる琉球王国の王府としての首里城復元は、県民の長年の悲願でありました。

首里城の建物については、国、県及び関係者のご尽力により本土復帰記念20年事業として1992年11月に47年ぶりに復元され、首里城公園として一部開園し、2019年2月には全面開園されました。

一方、展示物については、国内外に散逸した首里城関係の文化遺産を収集し、復元し、首里城等で一般公開していくため、県、市町村、各種団体、また多くの方からの協力を得て、首里城基金が財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてまいりました。

しかし、2019年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。

首里城の再建に向けた動きが加速するなか、偉大な先人たちが残してくれた貴重な美術工芸品等の遺産を収集・復元・保存し、首里城で展示できるよう、首里城基金の造成に皆様方の絶大なるご支援、ご協力賜りますよう、心からお願い申し上げます。

首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。

基金への寄付金等

基金の運用益

文化遺産収集事業
首里城に関する資料収集

収集

国内外に散逸した文化遺産を収集します。

復元

破損または消失した遺産を復元します。

保存

次の世代のために文化遺産を保存します。

育成

修理・復元・保存に必要な人材育成をします。

展示・一般公開

首里城公園HP



ON THE TRIP

